

インディアンの踊り



一、秋が幼児を誘っている

夏の日盛りの中をかけまわり、また、日かげにすっぽりと包まれて、安らぎをおぼえた子どもたちに、秋の日が静かに近づいている。

八月末ごろに、ときどき吹くひんやりとした涼風に、幼児は、ふと幼稚園・保育園のなつかしい友の顔、園舎の積木、お庭の砂場、すべり台を思い出し、思わず「おかあさん、幼稚園は、まだ始まらないの?」と、二期期の開始を待ちこがれ、ぐんぐんと活気をあおり立てられている。

反対に、こまやかな家族の愛情にひたって、そこから、ちょっと抜けがなくなっている子どもたち。「おかあさん、幼稚園、もう始まっちゃうの?」と心細く、早くも、一すじの涙がこぼれる甘えん坊。

二期期開始と同時に、運動会の計画を目ざして、さまざまな活

赤羽 美代子

動の展開が、頭の中に、いっぱいにつまってしまう先生方。

二期期は、園の方針、幼児の思い、先生の思い、しばしば大きな違いを含んで開始されます。

昔から、秋を讃美する詩や歌は、あとをたちません。空は青く、高く、秋の花は、春の花にくらべて、キリリッ、シャンと咲き、大人も子どもも、さわやかさを皮膚に感じ、大地を踏む足も力強い。このようなキリリッとした秋の自然界が、年間のカリキュラムの中で、運動会として、一つのアクセントを添えたのでしょうか。

二期期開始と同時に、教師は運動会の準備に入ります。そして、先生は子どもと違う秋を身にいっぱい感じてしまいがちです。

子どもは、春よりも澄んでひびく、お友だちの笑い声から、話し声から、足音から、敏感に、秋を吸い、かぎ、感じとっているのではないのでしょうか。「あれー、赤とんぼがとんできた」「え、

どこに」じっとしていられなくて外へとび出る子どもたち。「先生、○○ちゃんが、お家に帰りたいって泣いているよ」と知らせにくる子ども。玄関口で、おかあさんの手にしっかりとつかまって泣いている子ども。四月の入園時にもどってしまったかと心配される落ち着かない環境の中で、早くも、子どもたちを集めて、運動会の練習に入る大人の秋は、何と幼児とは遠い秋でしょう。

二学期が始まり、三週間たらずで、「うちの園は運動会はもう終わりました」と聞き、しかも、年少児の出場も数多くあることを知って、驚いたこともありました。多くの園が、十月早々から運動会が開かれるために、どつしりとした保育の場となり得ないうちに子どもたちは、運動会の練習を重ねます。子どもたちは十分に、園生活をとりのどし、友だち関係にも落ち着きを見せて、教師もまた、子どもと一緒に「子どもの秋」を感じる時を持つためには、十月なかばぐらいまで、ゆったりと、落ち着いた保育を持ちたいものです。秋の自然界が、あんなに両手をひろげて幼児を誘っているではありませんか。

二、運動会までの過程

社会的な行事に合わせて、運動会の日程を決めると、日ごろの保育の延長どころか、子どもに対して過重な負担をかけること

になったり、保育者にも、心身の負担がかかり過ぎることになったり、運動会の意義・目的がどこにあるのかを考えてみなければ、果して、運動会を実施する意義があるかどうか、批判の対象となることもしばしばあるのではないのでしょうか。

そこで去年、実施した運動会の過程の中の一つを書いてみたいと思います。

去年は、運動会を十一月七日に行ないました。十月なかばまで、日、一日と色づいてくる秋の色の中で、環境を整えました。十月に入ると、「昨日、兄、姉の学校の運動会に行って、自分も参加した」と、大喜びで語る子ども、また父の会社の運動会にも家族揃って行き、日ごろ見ない父の運動ぶりは、子どもにとって珍しいでき事であり、驚きでもあったのか、運動会の絵を画いたりして、あっち、こっち運動会熱が、会話の中からほとばしりました。

三、音楽・リズム

現職研究会の席で、運動会プログラムについて話し合いが展開されたことがあります。話題の中で、ときどき、「インディアンの踊り」というレコードの名前がありましたので、さっそくにそのレコードを求めました。その曲想は、原始的なリズムで、身体

の中に眠っている遠い先祖の血が目さますような音色です。いろいろ検討の結果、運動会に用いることにいたしました。

まず本屋さんに出かけ、インディアンの資料を見ましたが、全然ありません。旅行会社に行き、パンフレット、ガイドブック、写真集等も見ましたが、観光用写真が多く、インディアンの生活の実体を知らせる本物の写真はついになく、仕方なく、それらを求めて、各クラスの机の上に、あちこち置いておきました。子どもたちは、写真の本に群がり、何か話しながら見ておりました。が、やがて口に手のひらをあてて、ウワ、ウワ、ウアと奇声を上げ、ビョン、ビョンと、とび上がり、手を上、下にして踊り始めました。三歳児もつられて、ビョン、ビョン、教師はインディアン酋長の次に偉い人にされ、見物席に案内されました。

翌日から、「テレビにインディアンが出てきたよ」「インディアン、うそ、いわない」などインディアン遊びが始まりました。羽根のかんむりをつくり、腰に紐をずらりとぶら下げて、口に手をあてては、奇声を発しています。インディアンの民話を話すと、こちらが吸い込まれるように聞いています。こんな状態が一週間ほどつづきました。

二週間めに、レコード（インディアンの踊り）をながしておきました。序曲に、インディアンの、ボンボコ、ボンボコ、と響く

太鼓の音、次にインディアンの踊りのメロディー、これらが三回繰り返されます。一面の半分位から、突然ギャロップ、最後に静かな「さよなら」の歌とメロディーが流れて終わります。

おもしろいことに、子どもたちは、レコードを聞くと、あんなにも活動的に動き、はね、踊り狂ったのに、まったく手も足も出ないようすです。教師は「好きなように踊っていいのよ」と一生懸命誘っていますが、子どもは好きなようにといわれても、何をどうしてよいのかとまどっています。太鼓の音だけでは何か原始的人間にかえったように、リズム的に身体を動かしては床をボンボコとたたいているのです。

運動会の目標は、九月の末ごろに「参加と協力」と定め、幼児、教師、母も参加し、協力して身体を活動させる中に、共に創造した喜びをかもし出す運動会と定めました。

「インディアンの踊り」には、教師も参加して子どもとの協力の場を設定しました。教師はさっそくインディアン踊りの練習に取りくみましたが、まるで国籍不明のインディアンが、日本の盆踊りをしているような仕末です。つたない演技と技術を、子どもの前にさらすことのないように、何をなすべきか話し合いました。

そこで創作舞踊のT先生に、子どもたちの教師に指導をしてい

ただこうかと話ができましたが、指導を受けることは、子どもたちが、T先生のまねをし、子ども自身の創作のさまたげになるのではないかという心配が残りました。そこで、現職研究会の音楽の専門家、S先生におたずねしました。

S先生は「初めはまねでも、子どもたち自身が、音楽、リズムを身体にしみこませていくうちに、子どもは、まねをしている自分にはならず、自分のものとして、創作に入っていくので、まねがまねにならず大丈夫です」と助言をいただきました。

そこで、さっそくT先生をお招きし、手ほどきをお願いしました。太鼓のリズムに合わせて、躍動するT先生、子どもも、教師も汗だくになって「インディアンの踊り」を楽しみました。S先生がおっしゃる通り、子どもたちは、初めは、T先生のまねから入りましたが、しだいに、顔つき、動きが、何か原始的人間のようになり、リズムが五官に通じて、曲を楽しんでいる感じが、部屋いっぱいに広がり、調和と楽しいふん囲気が、かおりのようにただよっているのには、驚きと感激を味わいました。

T先生が園を去る時に、また、一つのハプニングが起こったのです。日本語のわからないアメリカ人の子どもが、色黒のT先生をインディアンと思いこみ、園の門を出て、T先生の後を追いかけて、礼儀正しく、しかも真剣な態度で「インディアンさん、あり

がとう。さようなら」といった時には驚きましたが、その時のT先生のインディアンの返礼にも感激しました。

運動会当日は、秋も大分深まってきましたが、予想されたほどの寒さではなく、まだまだ活動すると汗ばむ気候で、天高く、秋空のもとで運動会が開かれました。教師も、輪の中に入って、インディアンになり、子どもも、教師も、ひとりひとり、思い思いのインディアンの踊りを一生懸命に、その場で創作しながら踊りました。ひとりひとり、その演技と技術はつたなくとも、参加し、協力して楽しいふん囲気が生まれたことは、形にしばらく、それぞれが生きた運動会であつたと感じました。

三歳児も、年長組の踊りには、地面の太鼓をたたき、番がくると輪の中に入って、とんだり、すわったり、手をふったりで、自由な表現を楽しみました。最後に静かな「さよなら」の曲で終了した時には、暖かい、そして力強い拍手がわき上がりました。

四、反省

運動会への積極的な理解が未熟な時に、園のプログラムのみが先走るのは、この辺で反省したいと思う。形の上でどんなに整っていても、ひとりひとりが生きた運動会とはいえないと、反省をいたしました。

(霊南坂幼稚園)